



文化人切手といえば昭和24年から27年にかけて発行された、統一感のある格調高い雰囲気のある凹版印刷18種のシリーズが思い浮かびます。消印や使用例だけでなく近年はシート耳紙の版番号の収集も盛んになっています。

それからかなり時間が経って、平成4年から16年迄にわたって毎年1集ずつの形で、第2次文化人切手全13集31種が発行されました。こちらは印刷会社も版式もばらばらで、鳥居清長に至っては、本人の描いた作品を題材にするという、もはや人物切手とはいえない発行図案でした。

両方のシリーズに共通しているのは物故者を対象にしていることですが、第2次の方は人選を幅広く行ない、多方面からの人物を取り上げています。しかし、なぜか正岡子規だけが両シリーズの題材に重複して選ばれているのです。子規は松山藩士の家に生まれた士族の出の俳人・歌人で、盟友の夏目漱石と同じく慶応3年（1867）生まれ、病気のため35歳の若さで亡くなりましたが、ベースボールに野球という和訳をつけたことでも有名です。

はたして子規だけが2度も文化人切手になった理由は何なのでしょう？

（記：藤岡 靖朝〈日本郵楽会会員〉）